

平成30年度学校自己評価システムシート (県立川越特別支援学校川越たかしな分校)

目指す学校像	「自分の良さを生かし、社会の中で生き生きと活躍できる人材を育成する学校」
--------	--------------------------------------

重点目標	1 社会自立に向けた学習活動と特別活動を充実させる 2 集団生活のルール・マナーを守り、幅広いコミュニケーションの力を身につけ、社会の中で力強く生きていく力を育てる 3 地域と連携した支援体制の確立と希望と実態に即した進路を実現させる 4 地域や高校との関係を大切にしたい開かれた学校づくりを推進する
------	---

達成度	A	ほぼ達成(8割以上)
	B	概ね達成(6割以上)
	C	変化の兆し(4割以上)
	D	不十分(4割未満)

※学校関係者評価実施日とは、最終回の学校評価懇話会を開催し、学校自己評価を踏まえて評価を受けた日とする。

出席者	学校関係者	7名
	生徒	5名
	事務局(教職員)	6名

学 校 自 己 評 価					年 度 評 価 (1 月 3 1 日 現 在)		
年 度 目 標					達成度	次年度への課題と改善策	
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況 () は昨年度		
1	実習を含め授業では教員の指導に素直に従い活動する生徒が大半である。基礎学力の向上では教員が生徒の理解度を見定めながら補習等も行っている。特別活動も校外を含め積極的に参加する姿勢がみられる。これらの取組みを維持しつつ、生徒自身が達成感を味わい向上心を育むことに十分につながるようすることが課題である。	学習活動と特別活動において生徒が達成感や自己有用感を味わうことができるよう評価を工夫し場を提供する。	①日々の授業等の目標をわかりやすく説明し、生徒自身が振り返ることができるよう授業を工夫する。 ②「その場で声をかける」、「行事終了後にクラスや集会で披露する」など評価の場面と、生徒や保護者への通知方法を工夫する。 (①②についてはアンケートを行う。) ③評価の工夫と生徒の好ましい取組みについて、研修会など情報交換の場を設け、情報を共有するだけでなく尊敬と対話に基づく学校づくりを進める。 ④検定試験等の受験や部活動等での上位大会への出場など、学習活動や特別活動においてより高い目標に向けて取り組むとともに、他校との交流を行う。	①生徒が、振り返ることができる授業であったか。 ②評価の場面や通知方法を意識したか。 (①②についてはアンケートを行う。) ③情報交換の場を設けたか。 ④検定試験等の受験状況 ・大会等で成績 ・他校と交流したか	生徒アンケートの「授業の目標を意識して振り返りができたか」に対する肯定的な回答は73%であった。保護者アンケートの学習活動の通知に関する質問では「課題や努力の結果が分かりやすい」や「親子で学習について話せる」の回答が76%であった。新たな通知方法の希望に関する自由記述による回答は「このまま続けてほしい」、「満足」というものが中心であった。 10月23日に特別支援教育課指導主事同席の下、全教員が工夫を報告する研修会を行い情報交換した。 検定は延べ55人が受験し合格率63.6%で、顕著なものは英検3級2名、ビジネス文書事務速度部門1級1名の合格があった。陸上競技では女子が個人で全国大会出場を果たした。	B	行事や特別活動で生徒が大きな充実感を得ていることが、生徒及び保護者のアンケート結果に表れている。授業は約4分の3の生徒が目標を意識し、取り組んでいる。次年度は、学校の教育活動で一番多くの時間を費やしている授業において、生徒自身が達成感を味わい向上心を育むことに重点を置いた工夫を行うとよい。
2	生徒は、身だしなみは概ね良好であるが、挨拶、言葉使い、SNSなど他者とのコミュニケーションで課題がある。また、ルールやマナーなど規範意識も向上を図る必要がある。その際、学年団、特別支援教育コーディネーター、養護教諭、SC、保護者の連携や安全の管理は機能しているため、これら学校関係者の協力と、場合により外部機関と連携することで効果的な対応が期待できる。	関係者の共通理解と信頼関係に立脚した規律ある生活態度の育成を組織的に指導する。	①挨拶、言葉使い、SNS(LINEなど)の利用法などルールやマナーは全職員が目線を合わせ繰り返し指導する。 ②生徒の状況を踏まえ個に応じた対話を通じて生徒に課題を理解させ、改善しようとする意識を醸成する。 ③ケース会議の支援内容を共有しつつ生徒指導会議にて指導目標や指導方針を検討し、「誰が、いつ、どこで、何を、どのように」の役割分担を明確にし、普段から職員の得意分野を生かしつつ組織的に対応する。 ④生徒の状況と共に指導方針を保護者に説明し、合意形成する。 ⑤特別支援教育コーディネーター、養護教諭、SCなどや外部機関と連携する。	①目線を合わせ指導したか。 ②改善しようとする行動が見られたか。 ③役割を他の職員も理解していたか。 ④保護者の協力は得られたか。 ⑤効果的な連携が図れたか。	生徒指導部主任が情報の流れのハブとなり学年や生徒により差が出ないようにした。生徒アンケートではSNSでのトラブルは0%であった。 個々の生徒には、状況により支援と指導のバランスを考慮した上で教員の役割分担を朝会等で全体に周知し、対話を中心として継続的に対応した。また、保護者にも指導内容を説明し、協力を得ることができた。これにより、生徒によっては生活習慣を大きく改善することができた。 生活の支援については、コーディネーターが校内と外部の調整を行い、福祉及び医療との連携を図ることができた。	A	総体として、教員の指導と保護者の協力の下、生活のルールは守られている。個に応じた指導と支援の体制は維持しつつ、さらに規範意識を向上させ、校則を守る気持ちを育てること、身だしなみや挨拶などを中心に自律的に行動できるようにしていくことが課題である。
3	進路の手引きを活用しやすい物に工夫したり、生徒のニーズや適性を踏まえた実習先を開拓したりしている。生徒・保護者に寄り沿った進路指導と卒業後の支援を、企業開拓の必要性や支援センターの役割などの理解を深めながら組織的に進められるとよい。	進路指導を組織的に取り組む。	①保護者会などでも進路の手引きを活用し、保護者と教員の共通理解の下、進路指導を進める。 ②企業、支援機関と連携を強め、川越市以外の地区の企業開拓を行う。	①進路の手引きが保護者と教員で共有できたか。 ②実習先は増えたか。また、支援機関との連携は深まったか。	進路指導に関しての保護者アンケートでは97%が「ほぼ満足」以上の肯定的な回答であった。 各機関と連携しながら求人情報の活用等を通して開拓を継続し、本年の現時点での実習受入可能な新規事業所は42事業所である	A	進路の手引きや進路日よりなどの紙媒体で、一般的な基本情報は提供できている。一方で保護者は、卒業生の保護者の話や親戚き後の生活についてなど個別的、実情的な情報を求めている。
4	分校とは何かを中学校や地域に広めるために、学校説明会や体験入学・入試説明会を計画的に進めたり、HP・広報誌・学校案内などの情報発信を強化したりした。これらを維持しつつ、川越初雁高校との交流の機会を増やす必要がある。	インクルーシブ教育を意識して昨年同様に情報発信し、川越初雁高校との交流の活性化を図る。	①学校公開4回、体験入学3回を実施する。 ②合同行事と部活動交流、生徒会交流を活性化させる。 ③ビルメンテナンス授業など合同授業を積極的に行う。 ④授業公開などを利用し互いに授業を参観する。 ⑤合同研修会を開催する。 (②～⑤は川越初雁高校との交流)	①各行事の実実施回数 ②交流の頻度 ③合同授業の時間数 ④授業参観した教員数 ⑤研修会を開催したか。	学校公開は5/29、6/14、7/5、10/24に、体験入学は7/27、8/2、8/28に行った。 初雁高校との交流では体育祭、文化祭などの合同行事と卓球部、陸上部、クリスマスライブなどで交流した。合同授業は実施できなかったが、新規に高階西小学校でビルメンテナンスを行った。両校が授業公開期間を複数回設定し延べ15名程度が参観した。コーディネーター主催で研修会を予定している。	B	中学生向けの情報提供や上級学校訪問対応など縦の繋がりはある程度できているが、同世代との繋がりは取り込む余地が残っている。特に、合同授業など初雁高校との恒常的な交流を推進することが課題である。

学 校 関 係 者 評 価	
実施日	平成31年2月19日
学校関係者からの意見・要望・評価等	
川越初雁高校の施設内にあるので、母校としての意識が気になりましたが、生徒を見ているとしっかりとした母校感、意識が育っているように感じる。授業も職業だけでなく、普通教科の学習にしっかり取り組んでいることは良い。	
スマートフォンの利用方法やコミュニケーションのルールなどの学習は、本来、家庭ですべきものだが、学校でも継続した指導を行ってほしい。	
福祉関係など、川越初雁高校生徒の進路に、分校生徒との交流が何かしら影響を与えているのであろうか。分校生の福祉関係の就職はどうなのであろうか。	
児童園でも、交流をしていると見方、関わり方が変わっていく様子が見られます。小さい頃から様々な交流があるとよい。	

